

「カテゴリー」収集過程と自己過程との関連づけにおける情報処理 —カードソート法を用いた「自己カテゴリー」次元抽出の予備的研究—

上瀬由美子

本章では、中村（2002）の「自己カテゴリー化明瞭化の過程」における第1位相「カテゴリー群の収集・整理の段階」に注目し、カードソート法を用いた自己カテゴリー次元抽出研究の結果をもとにこれを論考する。

問題

Tajfel (1981; 1982) による社会的アイデンティティ理論の展開として、Turner (1987) は自己カテゴリー化理論を提出している。ここでは、上位の概念をいくつかのカテゴリーに分け、そのいずれかに自己をあてはめ、そのカテゴリーに自己を同化させていく過程を自己カテゴリー化とよんでいる。中村（2002）は自己カテゴリー化研究について、これまでカテゴリーの収集や選択の過程について十分な検討が行われていなかった点を問題として指摘し、次のように述べている。

「…自己という認知的構造体内に含まれる多数の認知的構成要素の中から特定の要素が選択されたのはなぜか、また、選択されなかった要素はいくつぐらいあったのか、選択された要素とはどのような点で異なったのかなどがなにゆえに不問に付されるのか…」(中村, 2002, p155)。

中村の指摘にあるように、従来の研究では特定の自己カテゴリーは所与のものとして扱われ、その形成過程についてあまり注目されてこなかった。このため、選択されたカテゴリー以外にどのようなカテゴリーの存在が認知されているのか、他との類似点・非類似点が不鮮明であるかどうか、他との類似点が多数あって顕著さの違いが不鮮明であるかどうか等について十分には明らかになっていない。カテゴリーの顕現化は文脈に大きく依存しているものの、我々は常に自己カテゴリーが自明な状況にいるとは限らない。日常生活では、様々な自己カテゴリーが並列的に顕現化されるような状況が多々あり、その中では特定のカタ

グリーンがその都度選択されていると考えられる。

例えば大学生が将来どのような仕事に就くか迷い、様々な職業をカテゴリー化して自分をそこにあてはめようとする場合を考えてみる。いずれの職業についても未就職の大学生にとっては自己が含まれる確かな内集団とはならず、自己と他者（職業群）との類似点や非類似点もさほど鮮明ではない。職業イメージは一般に、性別と社会的威信の2次元で整理される（Gottfredson, 1981; 1996）。しかし自己を明確にしようとする自己過程に関連づけて職業群をカテゴリー化する場合に、性別や社会的威信といった一般的な次元が重視されるのか、別の新たな次元からカテゴリー化が行われるかは不明確である。

また自己カテゴリーの中でも、自分がどの国の人間かという国カテゴリーは多くの人にとって明確なカテゴリーのひとつである。相良（2004）は小学生・中学生・高校生の外国イメージについて分析し、子どもたちが欧米対非欧米の軸と、日本との心理的・地理的距離の2つの軸から外国を分類していることを明らかにしている。また村田（2006）では日本人の外国人イメージが、Fiske, et al.（2002）が社会的ステレオタイプ研究で提出したものと同様の、「あたたかさ」「能力」の2次元で形成されていることを示している。ただし職業と同様に、自己過程に関連づけて国を認知する場合には、一般的判断次元とは異なる次元がカテゴリー化に用いられる可能性もある。

このように、日常の自己過程を明らかにするためには、カテゴリー化が精練されていない曖昧な状況で、何が選択の手がかりになるのかに注目していくことが重要と考えられる。

本研究ではこの問題意識をふまえ、「カテゴリー群の収集・整理の段階」で何が起きているのかを探索的に検討することを目的とする。この目的に沿い、大学生を対象とした実験を行い、カテゴリー収集過程に自己がどのような形で関連づけられていくのかを、職業と国を例に挙げて検討する。

また本研究では、カードソート法を用いてカテゴリー化に用いられる次元の抽出を試みた。これまで自己概念の構造に関する研究では、自己にかかわると予想される様々な項目を研究者が選出し、それらの項目への回答を因子分析する手法が多く行われてきた。ただしこの手続きの場合、カテゴリー化に用いる次元を研究者の側が方向付けてしまう可能性がある。そのため本研究では、Okamoto, Miyamoto, Kamise（1999）で用いられたカードソート法を使用して自己カテゴリー化を抽出することを試みた。ここでは分類対象とする各項目に情動カードを加え、カード群を調査対象者が自由に分類する形をとっている¹⁾。さらに本研究では独自に、分類カードの中に「私」カードを含めた。これは、自己を明確にしよ

「カテゴリー」収集過程と自己過程との関連づけにおける情報処理
うとする自己過程に関連づけてカテゴリー化を検討するためである。

方法

1. 実験材料

(1) 分類項目カード

(a) 職業カード：日本労働研究機構（2001）を参考にし、職業威信および性別次元に留意して20種の職業を項目として選出した。これらの項目を、それぞれ名刺大の白いカードに印刷した。これに「私」と書かれた白いカードを加え、計21項目を職業カードとして用いた（項目についてはFigure_1参照）。

(b) 国カード：相良（2004）で国イメージの分類に用いられた20カ国を分類項目として使用した。これらの項目について、それぞれ名刺大のカード（白）に印刷した。これに「私」と書かれた白いカードを加え、計21項目を国カードとして用いた（項目についてはFigure_2参照）。

(2) 情動カード：Okamoto, et al. (1999) で用いられた情動カードに、Yzerbyt, et al. (2002) の「怒り」「軽蔑」「幸福」を項目に加えた計13項目を使用した²⁾。これらの項目を、名刺大のピンク色のカードに印刷した。また何も書かれていないピンク色のカードも3枚用意した。

2. 実験手続き

着席した実験参加者のテーブルの前に、職業カードと情動カードを重ねるように並べた。その後で、白いカードを自由にグループに分けるよう求めた。その際、できるだけピンク色のカードも添付するよう促した³⁾。制限時間は決めずに、分類が終わった時点で申し出てもらった。実験時間は5分程度で、終了後に結果をデジタルカメラで撮影した。続いて国カードと情動カードの組み合わせについても、同様の手続きで分類を求めた。全て終了した時点でデブリーフィングを行い、研究の意図などを説明した。

3. 実験参加者・実験期日・場所

実験参加者は、江戸川大学の3年生13名と1年生9名（男子13名、女子9名）。実験は2006年6月と12月の2回に分けて、江戸川大学の校内で行った。

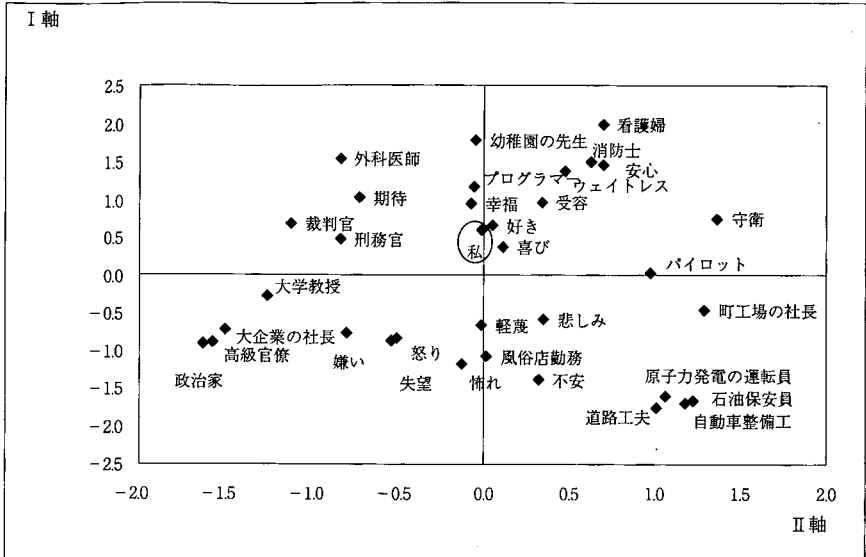
結果と考察

1. 職業カードの分類結果

職業カードのグループ数は2~12に分布し、平均は7.4 (SD=2.58) であった。

職業と情動の34項目について、同じ群に含まれた項目を1、含まれない項目を0と数値化し、34×34の数値マトリックスを作成した。これに基づき、まず「私」にどのような職業項目が伴ってグループを形成しやすかったのか、頻度を算出した。全回答者分についての「私」カードと他カードの組み合わせの総数を母数とし、そのうち「私」カードと当該のカードが同じグループに含まれた割合を算出したところ、最も同じグループに含まれる割合が高かったのは「ウェイトレス」(50%)であった。それに「幼稚園の先生」(37%)、「消防士」(32%)、「看護師」(31%)が続いていた。情動では「幸福」(54%)「好き」(45%)「期待」(38%)「安心」(37%)が、「私」と一緒にグループになる頻度が高かった。身近な職業が自分とともに、ひとつのカテゴリーを形成し、そこに肯定的な情動が付与しやすいことが示唆される。

さらに、数値マトリックスについて、INDSCALモデルによるノンパラメトリックMDS法を用いて2次元を抽出した (Figure_1)。「私」カードは軸の中心にあり、職業では前述の「ウェイトレス」「幼稚園の先生」や「プログラマー」などの項目とグループを形成しやすく、「好き」「喜び」「幸福」といったカードとも近くなっていた。回答者たちが自分を中心として心理的距離を測り、職業を分類していることが示唆される。また第1軸をみると、正方向に得点の高いものとして「看護師」「幼稚園の先生」「外科医師」が、負方向に高いものとして「道路工夫」「原子力発電作業員」が位置していた。これは社会的奉仕の次元と解釈された。一方、第2軸をみると、正方向に「石油工場の保安員」「守衛」「自動車整備工」が、負方向には「政治家」「高級官僚」があり、社会的勢力の次元と解釈された。この構造はFiske, et al. (2002)で指摘された社会的ステレオタイプの2次元構造と類似している。以上のことから、大学生が自己と関連づけて職業をカテゴリー化するという状況では、次のような情報処理が行われているものと推察される。まず普段の接触など自分との距離の判断がカテゴリー化の第一の過程として用いられやすく、距離が遠い職業については、外集団を分類する際の判断次元が援用されていく。



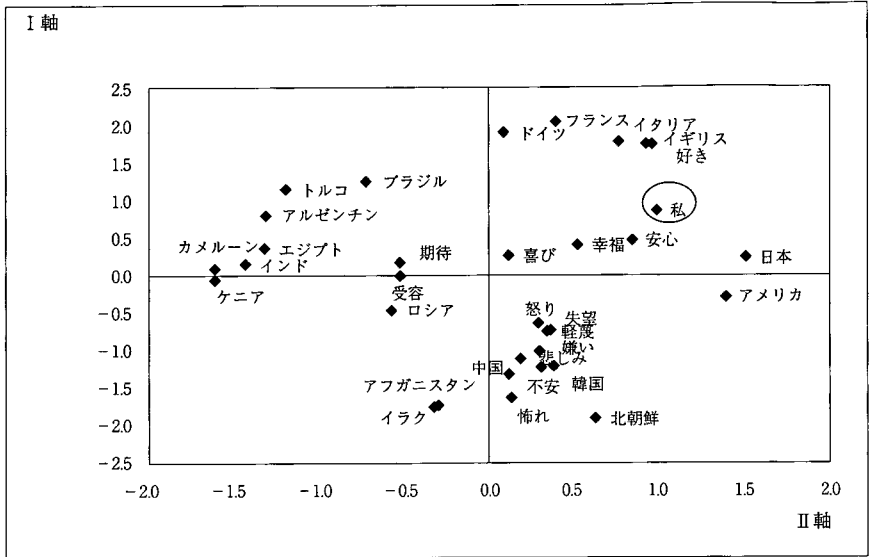
Figure_1 職業項目の布置
INDSCAL モデルによるノンパラメトリック MDS (第1軸×第2軸)

2. 国カードの分類結果

国カードのグループ数は2~8に分布し、平均は6.2 (SD=1.47) であった。「私」と同じグループに最も含まれやすかったのは「日本」(80%)で、以下「フランス」(38%)、「イタリア」(38%)、「アメリカ」(35%)などであった。情動では「幸福」(34%)、「好き」(49%)、「期待」(21%)などが伴いやすかった。

職業カードと同様に INDSCAL モデルによるノンパラメトリック MDS 法を用いて2次元を抽出した結果、Figure_2 に示す形となった。第1軸の正方向に得点の高い国として「フランス」「ドイツ」があり、情動として「好き」が伴っている。負方向に得点の高い国には「北朝鮮」「アフガニスタン」「イラク」があり、情動として「不安」「恐れ」が伴っている。この点から、第1軸は、好悪の次元と考えられる。一方、第2軸をみると、正方向に「日本」「アメリカ」「私」が、負方向には「ケニア」「インド」「カメルーン」がある。第2軸は日本からの心理的距離を示していると考えられる。

「私」カードは「日本」と距離に近いが、「イギリス」「イタリア」などのヨーロッパ諸国とも近い。実験参加者の中に「日本人」という自己カテゴリーが存在しながらも、個人としてはヨーロッパ諸国とも心理的距離が近いことがうかがわれる。



Figure_2 国項目の布置
INDSCAL モデルによるノンパラメトリック MDS (第1軸×第2軸)

3. 全体的考察と今後の課題

本研究では、カードソート法を用いて探索的に自己カテゴリー次元の抽出を試みた。職業項目、国項目を用いて実験を行ったところ、両課題共通して自分との距離がカテゴリー化の基準になっていることが示された。加えて、職業イメージや外国イメージに関する既存研究とは異なる判断次元も示された。また、国カードの分類では「日本」がカテゴリー化の基準になっていたが、「私」カードはヨーロッパの国々と日本の間に位置していた。国を分類する際には、日本人という社会的アイデンティティの他に、個人的アイデンティティも同時に活性化していたものと考えられる。これらの結果から、カテゴリー収集が自己過程と結びつけて行われる際には、自己と対象を切り離してカテゴリー化する場合とは異なる情報処理過程が生じている可能性が示唆された。ただし本実験の参加者は数が少なく、そのために既存研究で抽出された次元が再現されなかった可能性もある。また、分類カードにどのような項目が投入されるかによっても、判断次元が変化することは考えられる。本研究の知見を確認するためには、さらに回答者を増やし、回答者の属性や項目内容を変化させて結果を再検討することが必要である。

さらに、中村 (2002) が今後必要と指摘した、選択されなかった要素の問題や、

選択された要素と選択されなかった要素との違いについては本研究では明らかに
はなっていない。カード分類法では、実験参加者に自分の分類したカード群を見
ながら、面接を行うことも可能である。どのような基準で自他を区別したのか、
各群はそれぞれどこが違うのかを説明してもら从中から、カテゴリー化次元を抽
出することも有効であろう。今後は様々な手法をとりいれて、自己カテゴリーの
収集と整理の段階についてさらに深く検討していくことが求められる。

注

- 1) Okamoto et al. (1999) では、第1に提出されたカード群の意味合いを研究者側が把
握しやすくなること、第2に被験者に価値観を含んだ分類を促すことを意図し、情動カ
ードを分類項目に含めている。なお理論的背景や手続きの詳細、研究事例、手法の妥当
性に関する考察についてはOkamoto et al. (1999) で報告されているが、論文としては
未発表である。
- 2) Okamoto et al. (1999) ではPlutchick (1980) をもとに情動項目を作成しているが、
本研究では外集団や内集団に対して抱かれる典型的な情動も回答者にカテゴリー次元を
活性化させるのに有効と考え、項目を追加した。
- 3) 「もしグループにぴったりする感情がない場合には、何も書かれていないピンクのカ
ードに自由に言葉を書いて使用してください」と教示した。複数の回答者が、自分独自
の感情語を記入して使用したが、これらの項目については分析の対象外とした。

引用文献

- Fiske, S. Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereo-
type content: Competence and warmth respectively follow from perceived status
and competition, *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878-902.
- Gottfredson, L. S. (1981). Circumscription and compromise: a developmental the-
ory of occupational aspirations. *Journal of Counseling Psychology Monograph*, **28**,
545-579.
- Gottfredson, L. S. (1996). Gottfredson's theory of circumscription and compromise.
In D. Brown, L. Brooks, & associates., *Career Choice and Development*. 3th ed. San
Francisco: Jossey-Bass Publishers. pp. 179-232.
- 日本労働研究機構 (2001). 中学生・高校生の職業認知 資料シリーズ No. 112
- Okamoto, K. E., Miyamoto, S., & Kamise, Y. (1999) Quantified analysis of risk-
image based on data from semi-structured interviews, International Society for Po-
litical Psychology Twenty-Second Annual Scientific Meeting, Global Century/Lo-
cal Century: Conflict, Communication, Civility. Preliminary Program, 54.
- 村田光二 (2006). 外国人イメージの構造—調査データに基づく考察—森村敏己 (編) 視
覚表象と集合的記憶—歴史・現在・戦争, 旬報社, 203-233.
- 中村陽吉 (2002). 対人場面の心理的過程—分類の観点からの接近—ブレーン出版
- Plutchick, R. (1980). *Emotion-A psychoevolutionary synthesis*. Harper & Row.
- 相良順子 (2004). 子供の外国イメージとメディア 萩原滋・国広陽子 (編) テレビと外
国イメージ 勁草出版, 263-282.

第2部・1章その2

- Tajfel, H. (1981). *Human groups and social categories*. Cambridge University Press.
- Tajfel, H. (1982). *Social identity and intergroup relations*. Cambridge University Press.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group*. Blackwell Publishers. 蘭千壽ほか訳 (1995). 社会集団の再発見 誠信書房
- Yzerbyt, V., Dumont, M., Gordijn, E., & Wigboldus, D. (2002). Intergroup emotions and self-categorization: The impact of perspective-taking on reactions to victims of harmful behavior. In D.M. Mackie, & E.R. Smith, *From Prejudice to Intergroup Emotions: Differentiated Reactions to Social Group*, Psychology Press, Pp. 67-88.